
VITAL・CHAIN ~天魔ノ飛翔~

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

VITAL・CHAIN（天魔ノ飛翔）

【ノード】

N6820E

【作者名】

雨月

【あらすじ】

それが「冗談だと信じていた現実主義者の坂凪義人。しかし、それは事実だった！？嘘と虚栄、信頼の話。

プロローグ／第一話・我僕天使 レオクレア！（前書き）

義人「ども、皆さん坂凪義人です。物語内部じゃあまり自己紹介しないんでここでよく理解してもらうために自己紹介を……え？ 時間切れ？嘘！俺まだはなしたりてな……」

プロローグ／第一話・我儂天使 レオクレア！

古い一本の映画みたいに縦線がたまにはいるような映像。そこに映つてるのは切り立つた崖と黒い夜空に紅い月……そして、髪をなびかせる女性。

女性はこちらに興味がないのか気がついていないかのどちらかどうかはわからない。時折吹く風に美しい長髪を遊ばせ、紅い月を眺めている……と、彼女はこちらを向く。その目は紅かつた。夜空に浮かんでいる月を溶かしているような色だ。

「…………」

ノイズが邪魔し、彼女が言つた事が聞き取れなかつた。彼女がしゃべるたび、この世界が動くたび、その声は、その音は……ノイズに邪魔されて聞き取ることが出来ない。

彼女はこちらが聞こえていないというのを知つたのか、こちらへと近づいてこようとするのだが……彼女はこちらに来ることができない。どうやら、こちらが彼女から逃げているようだ。

彼女の顔が絶望に変わる。

こちらはとうとう女性を見ることなく振り返ると、山道を一目散に逃げ始める。途中、振り返るが、彼女が追つてくる気配どころか彼女の姿はあの切り立つた崖から姿を消していた。

これはバッドエンド……

プロローグ、

世の中には天使と悪魔がいる。何を言つていいんだ?といつ人もいるかもしれないが信じない人は別に信じなくともいいし、信じた人は信じてくれてかまわない。所詮は誰かの妄言だから。でも、その妄言を確かめた人はこれまで一人もいない。

白色の天使は黒色の悪魔を倒そうと考えた。

白色がこの世界のすべてだと思ったからだ。対して、黒色の悪魔はそんな天使に対してもう少し攻撃してきた天使にたいして復讐などをしていたが天使が攻撃しないならば彼らも攻撃をしなかつた。無駄な争いが嫌いだからではない、面倒だからだ。彼らは互角の能力を持ち、ただ白か黒かという色だけの関係だった。

それに、永い時間で紅色が加わった。

五分五分の勢力を所有している白と黒に参戦して彼らは両方の色を徐々に消そうとしていたのだが共通の敵として認識されてしまった紅がパレットから消えてしまう日は遅くなかった。紅はほぼ、なくなつたのだが存在 자체が濃い紅を倒すのに白と黒が払つた犠牲は多かつた。白と黒の勢力争いはやんてしまい、紅ももつ自ら何かをするというようなことはしなくなつた。

それから数年が過ぎた。

一、

ここに、一人の青年がいる。十七歳にもなればもう青年と言つてもいいだろう。

「ふう…………はあ…………」

彼は今、一生懸命ため息を吐き出し続けていた。彼の名前を坂廻義人という。学業の面で問題があるわけでもない。

「どうしたの？馬鹿な義人が悩むなんて珍しいじゃない？」

隣から顔を覗き込んできたのは彼の幼馴染である少女だった。結構顔が可愛いのだが、口が悪いことで有名で残念なことに彼氏はまだいない。さっぱりとした性格でどちらかというと女子の方々に人気がある。

「…………失礼な。僕は馬鹿じゃないぞ」

「馬鹿は馬鹿でしょ？」

「…………ふん」

そつぽを向いたはいいのだが、彼はそこでも再びため息をはいた。

「義人、それなら…………」

ここで、放送が入った。

『…………一年七組、坂凪義人君、お父さんがお見えです』

義人は立ち上がってため息を一つ吐くとその場を後にしたのだった。

「お、やつときたな？」

「父さん…………何？学校まで来るほどの用事つて何かあつた？」
笑えない話だらうと義人はすぐに考えた。この父親が持つてくるものは大抵、面倒なものだつた。意味不明なぐちゃぐちゃとした生命体をペットだといつて飼おうとしたり、みると呪われるといわれているビデオを見せられたりもした。

「…………なんと！お前の婚約者が決まつたぞ！…」

「…………どうせ、候補でしょ」

ため息一つ吐き出すと義人は聞き飽きたといわんばかりにそいつて下を向いた。

義人の父、驟雨がそんなことを言い出したのは一週間前ほどであった。

庭には謎の魔法陣が描かれ、中央には義人が小さい頃に使つていたズボンが置かれていたものだ。父いわく、あれはおびき寄せるえさのやうなものらしい。ズボンで食いつく婚約者がいるとは到底思えない義人だつたので世間の目もそれはあるから止めようとしたが暴走し始めた父を止める方法はもう一つしかなかつた。

「母さん、父さんがまた変なことをし始めたよ！」

「そうねえ、困つたものねえ、驟雨にも…………」

ほとほと呆れたといわんばかりに義人の母、里奈はため息を一つはく。

「そんなもの、むしとりあみで捕まえられるでしょ！」

「！？」

母も何故かぶつとんだようなことを言つており、既に義人には理

解できなかつた。

そして、今日に至る。

「さあ、今から家に帰つて結婚式だ！」

息子の肩をがつちりつかむと父はさつさと連れて帰つたのだった。

車の中、父は相手が天使であることを告げた。

「…………あのね、父さん。父さんの頭の中には天使はいるかもしないけどさ…………僕の頭の中には天使はいないんだよ」

超現実主義者の義人はお化け、妖怪、幽霊…………その他、存在が不確かなものを信じようとはしていない。よつて、それに値するであろうと天使と悪魔の存在など否定しまくり出会つた。

「おいおい、まったく…………事実を知らないお子様は…………まあ、いい。じゃ、いたら婚約者にするか？」

車の運転をしながら父はそんなことを義人に言つた。勿論、そんなものをまったく信用しない義人は首をたてに振つた。

「ああ、してもいいよ？大体父さん何歳だよ？天使だ」とか言つていると母さんに離婚されちゃうよ

「よし、これで俺の勝ちだな」

父は一方的にそう告げるとそれ以降何も言つことなく…………そんな父の後姿を見て義人は自分が成長したらこうにはなるまいと心に誓つたのだった。

結果を言つてしまふと、義人が間違つていた。

「あゝ契約に従つて今日から坂凧義人の妻になるレオクレア・ラミエールじゃ」

庭にあつた魔法陣は七色の光を発していて中央の部分が影を落としており、そこの上には白い翼を生やした可愛い女の子が浮いていたのだった。

「…………父さん、これは何の冗談？」

未だに現実を目の当たりにしながら義人はかたくなに真実から目をそらそうとばかりしていた。

「冗談？いいや、お前の賭け事の負けだろ？レオクレア、悪いけどよ……白い翼を消して地面に降りてくれないか？そうしないとこつはなしもしねえぜ」

父がそういうとレオクレアは頷いて白い翼を消して、地面に降り立つた。

「おつとつと…………あわつ……」

「おつと」

地面に降りるのが苦手なのか着地時にふらふらとなるとそのまま義人の胸にうずくまるような形になつた。

「あのわ、父わん…………」の子…………何歳？」

自分の胸にうずくまつたまま動かなくなつた少女を放つておいていたのだがなんとなく年下に見えるので父に尋ねた。

「えつと…………確か…………」

「すとつぶじや……！」

言おうとした父の声をさえぎる声が聞こえてきた。気がつけば恨めしそうな顔をして父を睨みつけているレオクレア。

「女性に年齢を聞くのは失礼じやろ？」

「おつと、そうだったな…………義人も気をつけるよ～レオクレアの奴はちょいと手に余るわがまま娘…………」ほん、手を焼くほど可愛いからな

「じゃ、がんばれよと言つて父は去つていつた。

「え、ちょっと～ちょっとどうじうじう」とだよ～」

自分より頭一個分ほど低いレオクレアのホールドは解けることなく、しかも力が強いのか離れることは出来なかつた。

「なかなかじやな」

「何がだよ…………君、天使つて言つてたけど嘘だよね？」

縁側に座つてそんなことを緑茶を飲みながら隣に座つているのはどうみても黒髪黒い瞳ではない女の子だ。義人はため息をつきながらそんなことを聞いていた。

「失礼じゃな。わしは天使じゃ」

「天使はそんな口調じゃないとと思うけど?」

彼の中での天使は大人の女性にあたる。義人は現実主義者にしてはどこかねじが外れているかもしない。古臭くて幼い顔立ちが残るレオクレアの存在はどうしても受け入れがたかつた。

「…………あのさ、本当に僕の婚約者になるの?」

「それは勿論じゃ…………ああ、気にするな。こんな身なりじゃが夜になつたらすぐいから」

「そうなの?ゼンゼン胸なんて…………ちよつと、何言わせるの!こほん、そんなことじやなくて僕が言いたいのは君はそれでいいのかつてこと。この際天使つてことはおないとくけどさ…………勝手に決められたんでしょう?僕の父に」

義人がそういうとレオクレアはつむむと唸つた。

「そうじやなあ…………そなたの父の坂廻驟雨はこっちの世界では有名人じやからなあ…………それに、はじめはいやじやつたがそなたに、その、一目ぼれをした」

「…………」

強めがちの目がちらちらと義人の顔を見ながらそんなことを言つてきたので義人は絶句していた。

「じょ、『冗談が好きなんだね?』

冷静な自分を取り戻すため彼はそう尋ねるがそういうつた瞬間、むつとしたレオクレアの顔を見ることになつた。

「冗談ではないぞ!わしは嘘は言わん!」

「そ、そうなんだ……」

断言されることは困つたことになつたぞと彼は思った。レオクレアはどうみてもまだ幼い。下手したら小学校を卒業した程度だといわれても頷けるに違ひないだろう。そんなのを婚約者にしたら社会の倫理を唱えられてしまう。

そんなことを考えていたらレオクレアがしたからのぞいてくる。

「どうしたのじゃ?」

「ん？ いや…………な、なんでもないよ」

「何か隠しておるな…………わしに話してみよ」

なんとなくえらそうな態度だが、心の奥では心配してくれているのが見える。義人はそういうつた態度をする相手に弱かつたりもする。「え、えつとね…………ぼ、僕はどうみても僕と君が結婚したら問題になると思うんだけど…………」

ピシリ――

そんな音が聞こえてきて、レオクレアの表情は笑つたまま固まつた。そして、そのままレオクレアはたずねる。

「…………それは、わしとの結婚がいやということか？」

「いや、そうじやないんだけどさ…………その、君の姿があまりにも幼く見えるからさ」

ぶちん

何がが切れた。少なくとも、義人にはそう思えた。その瞬間、高圧的な力の場が完成したのか義人は動けなくなつた。

「…………わしが幼いじやと？」

不機嫌であることを体現しているレオクレアに義人は黙る一方だつた。

「おこちやまじやと？ “ふあみれす”に行つたら絶対に“おこちまらんち”を頼むと？ ほほう、義人、いい覚悟じやな…………」

このままでは殺されるかもしれないと義人は素直に感じ取つた。そして、ああ、思えば短かつたが楽しい数十年だった。もうやりたいことは何もない…………いやいや、まだやりたいことはたくさんあるなど思い直した。

しかし、結果的に義人が殺されることはなかつた。気がつけばレオクレアは義人の膝の上に乗つていてお茶をすすつていた。その姿

がさまになつてゐるのは彼女の言葉がおじいちゃんっぽいからだろう。

「まあ、あれじゃ……初対面の者どもは絶対にそういうからな。それならば夜の姿を見せよう。……あと、三時間ほど待つておれ……ああ、そうじゃな、それまで時間を潰すために町を案内してくれ」

「ふらいどを傷つけられたからなとレオクレアはそう言つて義人は力なく頷くしかなかつた。

午後五時五十九分。義人は電波時計を確認した。場所は彼の家の庭で、魔法陣の上にレオクレアは静かに立つていた。

「…………！」

六時を指した瞬間、レオクレアは光を発し、次の瞬間にそこにいたのは……

「どうじゃ？ これでおぬしに身分相応な姿になつたじゃら？」

「…………」

そこにいたのはあの幼いレオクレアの面影をしつかりと残す美少女だった。

「ふむ、あまりの美貌に目が奪われたか？」

「う、うん……」

義人がそういうとレオクレアは驚いたようにきょとんとした。

「…………まともにかえされるとは思わなかつたな…………」

義人はじつと見ていたが途中で目が止まるところがあつた。それは、胸だった。

「…………ここは成長しなかつたんだね」

そういうた義人の脳天にチョップが突き刺さつた。

「…………義人よ、人間という生き物は時には本音を隠し通さねばならないときがあるそうじゃ。素直ないい子は長生きは出来んぞ？」
強気な瞳はいやな笑みを帯びており、義人は右手が突き刺さつたまま静かに頷いたのだった。

「「めん、気にしたんだね」

今度は左手のチョップが義人の顔面に突き刺さった。

「…………いらぬ同情じや。次は手加減せんからな？別にわしは気にしていない」

「ふあい…………おっしゃる通りです」

突き刺さつていた左手を離してもらつと、義人はため息をついた。
「けどさ、本当にいいの？君みたいな人が僕の婚約者つて…………」「いいのじゃ、これはわしが決めたこと…………それにまだ…………」

レオクレアが言うと義人の母が立つていた。

「そうよ、まだ婚約者いるわよ？」

「母さん？いつのまに！？」

ぎょつとしている義人を無視して母は言ったのだった。

「さあ！私が虫取り網で取つてきた子を見てみなさい！……」

家中から人影がゆらりと現れたのだった。

第一話・レオクレア&セルフ（前書き）

赤「我々、モテモテの男たちを一方的な私怨で恨みをはらすは一れ
むばすたゞ！」義人「うわ、変なのが出てきたな……」赤「む
？君はもて男か？」義人「いえ、断じて違います……あ、あちら
のほうに美少女を一人連れていた人がいましたよ」赤「そうか……
…ありがとう、いくぞ、青と黄！」青＆黄「「了解！！」義人「
ふう、変な奴らが去つていってよかつた」レオクレア「む、義人、
今変な連中がいなかつたか？」義人「気のせいだよ」

第一話・レオクレア&セルフ

「…はーれむばすた~ず…！」

赤 「我ら！」

青 「はーれむ」

黄 「ばすた~ず…！」

ここで後ろのところが爆発する。

赤 「女にモテル連中をこの世から…」

青 「根絶やしにするのが！」

黄 「我らの使命…！」

ここでいきなり町の場面に移行する。

赤 「早速いたぞ…」

青 「さすが、妬みだけはすごいリーダーだ！」

黄

「こんなに短時間で見つけるなんて！」

そこには両手に花の人物、A（天道時 時雨）がB（霜崎 亜美）

とC（天道時 薔）と歩いている。

赤 「喰らえ！」

青 「我らの…」

「我らの…」

黄

「怨恨の一撃を！！！」

「（）（）（）で三人がそれぞれの武器をくつつけて三位一体の攻撃を仕掛け。

赤、青、黄

「（）（）（）なんでそんなにもてるんじやああ！！！」

時雨

「ぐわあああああああ！！！」

薔

「ちょっとー兄様に何するのよー！」

青

「も、もつとお」

亜美

「時雨君に何してやるのよー！！！」

ぼ

（）（）（）

黄

「か、快感！！」

二人の攻撃にあい、青と黄がやられる。

赤

「く…………やられてしまったか！！！」

赤は一人で夕日にもかつて続く。次回、はーれむばすたゞー！

「第五十七話！沈め！太陽！」

家の中から出てきたのは透けるような肌（実際に透けている）をした闇のような髪に引き込まれるような瞳の女の子だつた。美少女、この一言に尽きる気がしないでもないが頭に被つた虫あみがすべてを台無しにしてくれていた。ほっぺを膨らませてはいるが、それを入れても虫あみがすべてを壊している。

「…………へえ、なかなかいい男じやない」

虫縄をかぶつた美少女がこちらへとやつてきた。近づかれるだけで恐い雰囲気を受ける。

「え、あ、そ、まあ……どうも」

義人はなんと返していいのかわからないのか意味不明なことを言おうとして色々とおかしいことになつた。その表情に氣を悪くしたのかレオクレアが義人を睨みつける。

「はつきりと答えるのだ、義人！！」

「ちや、ちやんとかえしてよ！」

そこでようやくレオクレアの存在に氣がついたのか常闇を背負つている印象を受ける美少女は答えた。

「あらら、これはこれは……我僕天使レオクレアじゃない？今度は人間に取り付いたわけ？」

むつとした表情のレオクレアは答える。

「ほう、ずいぶんと失礼なことを言うな、墮落悪魔セルフ……いつ、わしが我僕だという噂がたつた？」

それに対して挑むような瞳に態度のセルフと呼ばれた悪魔。

「代々神様に仕えていた天使の家系のくせしてわがままのお嬢様だつて私は聞いたわよ？そんなものぐさがこの子の婚約者ですつて？笑わせてくれるわね、オホホホ……」

□元に手を当ててセルフはそういう。

「おぬし……よくもまあ、そんな田舎しい口を……わしがだまつておればいい氣になりおつて……」

「…………」

義人はどうせ□をつっこんだとこりであれだ、自分は役に立てないし、うるさいといわれるのが落ちだらうから黙つてお茶をすますつ

ていた。まあ、この場合彼の判断が一番正しいと思われる。

「はいはい、喧嘩はそこまで！セルフも悪かったわね、気に入らなかつたら帰つていいわよ」

帰つていいわよの部分にはなんだか違つてユアンスがあつた気がしないでもないが、異世界だろうがお隣だろうがそれは帰るに違い

ない。些細な違いだ。ただ、距離と次元が違うだけと言つていいだろう。

セルフは犬歯をむき出しにしているレオクレアのことは放つておいて座つている義人に目線を合わせるとそれまでとは打つて変わつてにこりと笑つていつた。

「…………はじめまして、義人。私の名前はセルフ・フリー・デン。セルフって呼んでいいわ」

どきつ

「え、う、うん。僕の名前は坂凪義人だから…………」

義人は一瞬見とれていたのだが慌てて返事をする。レオクレアはぶすっとした表情で言う。

「…………わしのときは“どきつ”という音が聞こえなかつたな？」

答えに詰まる義人に對して答えるのはセルフ。にやつとして彼女は言つた。

「そりやま、当然でしょ。私の場合はきちんと夜に挨拶したんだから。どうせ、おこちやまモードで姿を現したんでしょう？」

「うぐ…………ま、まあ確かにそうだが…………」

事実は素直に認めるところがいいところだろう。彼女の数少ないいいところの一つかもしれない。

「そつち系の趣味だとは思えないからね…………義人はそうね…………」

義人の顔にだんだんと顔を近づけていくセルフ。義人はぎょっとしながらも動けないでいた。そして、セルフが一瞬だけ、大人びた表情を見せる。

「…………！？」

義人はそれに驚き、その瞬間にセルフは義人から顔を離した。

「うん、義人は大人のおねえさんが好きね」

「！？」

「ほ、本当か！？」

レオクレアはぎょっとしたように義人を見つめ、セルフは頷く。

「まあ、残念だけど……私たち一人じゃ彼の好みには少々難点があるわね……年齢食つてる割にはレオクレアも幼いし……」

「ほつとけ！」

レオクレアが言葉でそう答える。義人は心の中を見透かされたような気がしたがまあ、事実だからしじょうがないかとため息をついているところがあつた。

「むう、それよりも……残念だがわしのほうが義人と早くであつたからのう。優先権はわしがさきじや」

「あらら……まあ、どうせあなたじや義人に呆れられるだけだわ」腰に手を当ててにやりと笑うセルフに対抗心を見せるレオクレア。ただ一人、義人だけが会話から置いてけぼりを食らつているような気がしないでもない。彼の母親はとっくにこの場から姿を消していった。

「ふふん、そう言つていられるのも今のうちじや！一週間で義人の心をわしがわしづかみできなかつたら義人の前からさつてやろう！」

駄洒落が入つていてもしかりが気にしないでもらいたい。

「あらら、そんなこと言つていいの？我仮天使に何が出来るのかしら……いいわ、私も同じ条件で……そうね、ハンデとして隙を見て義人と一緒にいるだけで彼を落として……いえ、墮としてみせるわ」

目に炎が燃え上がる天使に対して黒い瞳を静かに燃やす悪魔。義人はこれから僕はどうなつていくのだろうかとか身の振り方を考えておいたほうがいいかもしれないと彼は思つていた。

しかし、どうせここで考えても意味ないか！と考え方直して彼は言った。

「ま、まあとりあえす……」

「何じや？ 義人？ 申してみよ」

「何？ 義人？」

「とりあえずさ、家に入ろうか？ 近所の視線が痛いから」

「気がつけば家の外から何事かと庭を眺めている」近所さんの姿があつたのだった。

「ふう、風呂とはいるものだな……」

お風呂から上がってきたレオクレアをみて義人は頷く。

「そうだね、これにはいらないと僕は気持ち悪くてさ…………」

「一日でも入らないと一日が終わらないような気がするよとぼそぼそと言つていた。

「ん? どうした?」

ちらちらとレオクレアをみていたのがばれたのだろう。レオクレアは義人に対して首をかしげた。

「い、いや…………」

義人は風呂上りの美少女を見たことがあまりなかつたのだが、その姿がほてつていてなんとなく風呂に入る前と後では違つたように見えたのだ。（当然である）フリフリの白いパジャマがなんともまあ、かわいらしいこともあつたのだろう。

「ほほう、わしの色香に顔を真つ赤にそめておるのだな？」

しつかりと義人の心を読み取つたのだろう。レオクレアはにやりと笑うと義人へと一步足を踏み出した……が、

「はい、ストップ！ 競争は明日からつていつたのはそつちでしょ」「ぬがつ！！」

いきなり横からレオクレアが一步踏み出した足にたいして足が伸ばされてきたかと思うとそれは意思を持つたかのようにレオクレアをこかした。

「せ、セルフ！？」

義人の目は釘付けになつていた。セルフが着ているのはおそらく、大き目のワイシャツだけだ。

「あいたた……おい、セルフ……義人の目が釘付けになつておるぞ！ おぬしこそ競争してゐるではないか！ そういうのを“ふえあ”でないといふのではないいか！？」

鼻をさすりながらレオクレアは下からセルフを睨みつける。

「……あのねえ、私は夜寝るときいつもこいつだつたでしょ？」

「……そつだつたな」

「勝手にみてるのは義人のほうよ。今夜、襲われちゃうかもーきや

」

片足上げて頬に手を当ててそんなことを言つているセルフを見て義人はなんとか冷静になれた。そして、両親との話を思い出す。

それは、數十分前の話だつた。

「え、これから緊急家族会議を開きたいと思ひます」

「いえ、」

「……」

「あ、時間がないので簡潔に言ひますが、俺らが出る幕ではないとのことなので最終的に一人が決めた一週間という限られた時間で嫁を決定します。異論はないな？」

「まあ、義人がどんな選択をしても母さんは何も言わないわ」

「……」

「誰も何も言わないので、では、我々はこれから一週間の間去ります」

「久しぶりの夫婦水入らずね」

「じゃ、好きなようにしろよ」

「じゃ、元気にしてるのよ、義人」

これが、一方的な会話である。義人はその間ぐるぐるまきにされてガムテープを丁寧に口にさせていた。

「ふむ、わしが義人のお弁当を作ろう。それで異論はないな？」
レオクレアがいきなりそんなことを言つてきて義人は回想から戻ってきた。

「え？ あ、お弁当作つてくれるんだ？」

「当たり前じゃ。おぬしの母上、父上がいないのだからな。それとも普段は義人が自分でお弁当を作つてあるのか？」
たずねられた義人だつたが首を振つた。

「いや、作れないよ」

「ふむ、任せておけ」

それに対してもセルフはレオクレアにばれないよう笑っている。

義人は不思議に思ったのだが黙つておいた。

「セルフも異論はないな？」

「ええ、『自由に』」

「わしらが仲良くお昼をともにしても邪魔するでないぞ？」

「どうぞどうぞ、『自由に』」

何かを想像しているのひつ……彼女はおもしろくてたまらないといつた具合ににやにやしつぱなしである。未だにレオクレアは気がついていないのか気にしているようなそぶりは見せなかつた。

「……」

義人としてはなにやらセルフが悪巧みを考えているような気がして気が気ではなかつたのだが、ここで彼女に答えてもらつたところで待つてているのはレオクレア対セルフという今夜の新たなデスマッチが待つていてるだけだろ?から口は閉じておいた。基本、事なき主義なのである。

「じゃ、ちょっと早いけどそろそろ寝ようかな。……」

明日から両親がいないのである。レオクレアがお弁当を作つてくれるといつたのだが朝食を用意してくれているということまでは言つてくれていないので間違いなく彼女は朝食を作つてくれないのであらう。

「さあ、義人、ともに同じ布団に肺つて寝よう」

「うん、そうだね……今の『冗談だからね』

腕をつかまれたのだが義人はそれを放してもらい自室へと戻つていつたのだった。

その日、義人は非日常な二人組みのことについてじっくりと考えることが出来た。結果、これはもう自分ではどうしようもないといふことがわかつたのだった。つまり、黙認である。

「ま、どうにかなるよね」

義人はそういうと静かに目を閉じたのだった……。

かぱつ！

静かになつた義人の部屋の天井からそんな音が聞こえてきた。そこにいたのはなんと、レオクレアだつた。屋根裏から義人の部屋にやってきてロープでゆっくりと義人の寝ているベッドへと覆いかぶさる予定だつたのである。

「にししし……まさかわしが天井裏からやつてくるとは予想もしておるまい！」

嬉しそうにそう呴いているレオクレア。確かに、そんなことをわざわざ考える奴はいないだろう。別に義人の部屋には鍵も罠もかけられてはいらない。

次の日、義人は朝から絶叫することになる。

第三話・我僕天使レオクレア！ 終了（前書き）

義人「はあ……さつきもまた見知らぬ怪人に襲い掛かられてしまつた……」ほん、さて、そんなことより……実はこの小説皆様にはじめに言っておかなくてはいけないことがありました。本当にたら前回にしゃべってたんですけどね。正義の味方？らしき人に声を翔られていたりしたので忘れていました。え、じつは、今回までしかレオクレア、セルフは出できません」レオクレア「ええつ！？わし、もう出番なくなるのか！？」義人「ええ、まあ……さて、それを楽しみにして？今回も読んでください。変哲もない単なる学校の話ですが……次回はきっと殺伐とするでしょう、多分」

第三話・我僕天使レオクレア！ 終了

三・戦隊物に出てくるよつた怪人

怪人A

「ひひつー！」から先はいかさんぞ！通りたくば俺を倒して見せろ

！」

時雨

「ていつ！！」

怪人A

「ぐはつ！！」

時雨

「な、何で学校帰りにこんなゲテモノ（頭にゴミ箱をつけて海老の
ような体をしてはいるがイカやタコの足がついている）が襲い掛か
つてくるんだ！？はつ！もしやこれは何かの予兆？僕、今日から世
界を守る一年契約のヒーローに？てか、サブリーダーとかは？」

剣治

「とうつー！サブリーダー登場！」

時雨

「…………」めん、冗談だつたんだ。帰つていよいよ

剣治

「おいおい、時雨君……それはないだろ」

時雨

「どうせ、君の事を知つてゐる人なんていないからさ」

剣治

「まあ、そくかもね」

そう言つてゐる時雨と剣治に對して相手はぶつぶつと何か言つて
いる。

怪人A

「モテ男め～…………」

「…………怨恨かい！そんなことより正義の味方でも倒しなよ！」「…………」
そういうて時雨は最後に怪人Aを蹴つ飛ばしてさつさと帰ろうと

怪人A

「…………もてるなんてやるかな…………ベルジヨン博士め
どうせならイケ面怪人にしてくれれば良かつたのに…………無念

目が覚めると目の前に美少女の顔があつたという話は良くある。僕の目の前にも昨日知り合つた美少女の顔があつた。

「や、やつとおきたか…… 義人よ」

そこにいたのは腹部にロープを巻きつけて天井から降りてこよう

つている。

「あ、朝から物凄い起こしかたしてくるね？」

てくれなくても良かつたのだが

いや、昨日の夜に忍び込もうとしていたんだが……ふむ、失敗

「ん? 可か
い
た?

「いや、何も……それより、朝食が出来てあるぞ」

鼻をくんくんせせながらレオクレアは僕にそんなことを言つてきた

「まあ、口譯じやからな」

意外である。

「ま、待て！わしを助けてくれるね！」

「ま、待て！わしを助けてから朝食を食べに行へのじや！」

僕はロープを解いてあげてからレオクレアとともに朝食のこおい

がしていく場所へと向かったのだった。

そこにはご飯と味噌汁、田玉焼きが置かれていた。どれも湯気が立つていて美味しそうである。

「へえ、美味しいだね」

「ふ、まあな」

レオクレアがそんなことを言つていると、Hプロン姿のセルフが現れた。

「な、にが『ふ、まあな』よ。これ作ったのは全部私でしょーに」お玉を肩にぽんぽんと当ててそんなことを言つていれる。

「そ、そつなの？」

「…………～（口笛を吹いている）」

レオクレアを見るが、彼女が見ているのは斜め上のカレンダーだった。

「どう考えたつてその姿じゃ料理なんて出来ないでしょ」

「た、確かに…………」

「むーた、確かにとは何じやー！わしだつて料理できるんじやぞー！よ、よおしー！今日のお皿を楽しみにしているがよいー！わしの実力をみてやるー！」

そんなことを言つて自分の席に座るレオクレア。Hプロンをつけたままセルフが僕の前に座つて三人でいただきますをすると朝食が始まつたのだった。

「ふんふん、どれも美味しいねえ」

「当然じゃ」

何故、作つてもいないレオクレアが胸を張るのかがわからないのだが、とりあえず料理は美味しかつた。

「ありがとう、義人。まあ、料理は得意分野だから任せて」

セルフはそういったあと、箸を動かす手を止めてご飯粒が口の周りについているレオクレアを吹いてあげていた。

「ほら、また…………」

「む、ご飯粒か……放つておけばいいものを、
その姿を見ていると子どもな妹レオクレアを助けてあげているよく出来た姉セルフにみえた。

「何じや、義人？」

「え、ああ……姉妹に見えてさ」

ふと思つたことを一人に言つた。そつすると、両方ともおかしそうな顔をした。

「そりやそうよ、姉妹だもん」

「え？」

「わしが姉じや」

「!？」

正直、姉がレオクレアといつことに驚いた。

「なんじや？妹が姉の世話をするのは当然じやう？」

普通逆であるつ。

「ま、名前とか容姿とか、色々と義人がつっこみたいことはわかるけどね……今度また教えるわ。今、私たちに残された時間は少ないもの」

時計を指差す。そこにはあと三十分ほどで朝のH.R.が始まることいふぎりぎりの時間を示していたのだった。

滑り込みセーフがあるなれば、滑り込みアウトもある。僕はセーフ。だけど……

「転校早々遅刻とは情けないわね~レオクレア」

「む、転校曹操じやと? 猛将じやな」

「いや、曹操なんだけどそつちの曹操じやないから……それじゃ意味つたわんないからね」

今のは休み時間。先ほど、先生がレオクレアとセルフの紹介をしていた。僕はそれを頬杖をつきながらみていた。

「あ~レオクレアじや。わしが困つてこりを見た場合は率先して助けるように」

無駄にえらそうだ。いや、態度も自分がえらいと思つてゐるな。

「なあ、義人…………俺、レオクレアさんの下僕になるわ」

「…………勝手になれば」

そう言つてくる男子も少なからずいるといつては認めねばなるまい。

「ほん、セルフといいます。私が困つてゐるところを見かけた場合は出来るだけヒントだけを下さい。私は自力でやりますから」

最後に微笑んだ点でポイントが上がつたのだらう。

「義人、俺…………彼女と肩を並べて下校するよ」

「…………そ、がんばつて」

勝手に夕陽に向かつて帰るがいいさといいたくなるようなことを言つ人だつていた。つまり、この一人はレベルの高い美少女なのだろう。

そんなことがあつたのだが、彼女たちの周りに男子生徒はいない…………というより、いるのはいるのだがそれは僕だ。休み時間になつてすぐさま一人は僕を屋上に連れてきたというわけである。

「さて、義人よ…………学校のことはすべておぬしに任せせるぞ」

「へ? どういう意味?」

僕がそう尋ねるとセルフが答えを返してきた。

「…………まあ、レオクレアがまともに学校生活を送れるとは思つてなかつたけどね。義人、席が隣だからレオクレアが授業中にわからぬいところがあつたら教えてあげて」

そういうつてセルフは僕の前から姿を消したのだった。

「まずは数学じゃつたな?」

「…………う、うん」

「期待してあるぞ 義人!」

「機嫌にレオクレアはそういうと屋上を後にする。」

「…………やれやれ、これからどうなるんだろ」

そういうつても始まらないことを僕はそう言つていたのにあえて口にしてみた。屋上ではいたため息はそよ風に乗せられてどこかへ飛

んでいったのだった。

「ふう、義人のおかげでまずは好スタートじゃな

「…………そりゃどうも」「

レオクレアのおかげで僕の宿題が増えてしまった。

授業中、ほぼ僕にぴたりと引っ付いていたレオクレアは何度か注意されたのだが、そのたびに僕を見てくるのだ。

助けて欲しいと視線を送つてくるのはわかつたのだが、その目線は僕らの間だけ伝わっていたようで、先生には当然のように伝わっていなかつた。

先生には無理やり僕がレオクレアと机をくつづけているように見えたのだろう。だが、あいにく数学の先生は陰険で知られている先生で言葉で注意しても聞かない場合は勝手に宿題を出す。ちなみに、男子一人でも宿題を出されたらそのクラスの男子すべてにもれなく宿題が出されるという連帯保証機能付である。

「義人に断罪を！」

「聖なる肅清を！」

「彼女とのデートをキャンセルしないといけないんだぞ！」

「吊るせ！」

「吊るせ！」

休み時間、僕は吊るされそうになつたのだった。

「なあ、義人

「何？」

「…………わしが言つことを一つだけ守つて欲しい」

放課後、若干ぼろぼろな感じの僕にレオクレアは言った。

「絶対に、絶対に封筒が来てもそれをあけたら駄目だぞ」

「?わかつたよ」

僕は次の日、この約束を破り、すべてを失つてしまつ。

第四話・VITAL・CHAIN（前書き）

義人「さて、この話から本格的に始まりました……今思えば壮絶なプロローグ？だったと思います。ま、冗談はさておき、これからどういった話になるのか……骨子案は検討中です」

第四話・VITAL・CHAIN

四：涙の出るような友情

時雨

「……ふう、大丈夫か」

剣治

「どうしたんだい？ そんなにおびえて……」

時雨

「最近や、なんだか変な色物連中に追いかけられている気がするんだ」

剣治

「色物連中？ メイドさんかい？」

時雨

「違う違う！ 戦隊物の格好しててる三人と海産物の怪人みたいな」

剣治

「あ～、それって道の先にいるあの人じゃない？」

時雨

「！？」

赤

「また会つたな！」

青

「前回はぼろ負けだつたが」

黄色

「今回は負けない！」

怪人A

「お前を倒して我々が色男面いっめんフェイスになるのだ！」

決めポーズを決めている四人にはばやく近づいた時雨はその四人をあっさりと倒してしまった。

時雨

「これ以上近づくと警察、呼びますよー。」

剣治

「そうだね、そうしようか」

二人は去っていき、動けるものは一人として四人の中にはいなかつた。

(続く!)

それにあつてはいけない。
それを開けてはいけない。
それに触れてはいけない。
それを見捨ててはいけない。

それは異世界の扉、日常との別れ。

「ん?」

下足箱の中に入っていたのは大きな茶封筒だった。そして、上記の言葉が書かれている。

「これは……なんだろ?」

僕は当然のようにそれを触つたりしたのだが、あけてみるとこした。へんなものだつたら元に戻しておけばいいだろう。

僕は、それを、開けた。

VITAL・CHAIN → 天魔ノ飛翔)

子どものころ、ガキ大将のような存在にいじめられたことはないだろうか?まあ、いじめつ子だった人にこの話をしてもわからないだろうが、いじめられたことがある人ならわかるだろう。それこそ、彼らは暇つぶしとしてそれを行っているときもある。ただ、都会から引っ越してきただけでからかつてきたりする。

「や～い!紅目!」

僕の場合は目が紅かった、ただそれだけの理由で引っ越し早々相手方がからかってきた。人数は五人くらいでまあ、周りの連中は弱

そうだった。

「…………

「おい、なんとかいえよ！」

「…………“**血扇**！”」

僕が右手を振ると彼らに紅い閃光のようなものが飛んでいき、彼らをなぎ倒していった。

「う、うわああああん」

「けつ、子どもが僕に話しかけるんじゃないよ、まったく…………」

この出来事が起こったのは今から十年ぐらい前…………小学校一年生ぐらいのころだろう。今となってはいい思い出である。この時点

で、見た目は子どもだったわけだが…………。

僕が今現在通っている高校の屋上には鍵があり、いけない。それは何故かというと、危険だからだそうだ。過去一度、この高校の屋上からあやまつて飛び降りてしまった人がいるらしい。どういった状況で飛び降りてしまったのかわからないのだが、聞いた噂ではその人は夜な夜な屋上をさまよっているそうだ。

話が逸れてしまった…………。

僕がこの家にやってきたのは一週間ほど前だ。両親が海外に出張してしまい、僕だけ残されたのだが一人ではさすがに生活しきれないと思ったのだろう、両親は隣町に住んでいる親戚のもとへと僕をおいていった。

「ねえ、義人君何してるの？」

「本読んでるんだよ

「へえ、何の本？」

「倫理

「面白い？」

「まあまあ

「ふうん」

おじさんとおばさんが帰つてくるまでそこの家の娘である美咲ち

やんの相手をしていなくてはいけない。彼女は高校一年生で、僕の一歳年下である。何事にも興味を示すような性格なのか、はたまた静かなところが嫌いなのか知らないがこの一週間の間ずっと僕の近くにいる。そして、五分に一度は話しかけてくるのである。

さて、他人について説明ばかりしているのはどうかと思うのでまあ、してないっちゃしてないんだけどね。

僕、坂凪義人について少々説明しておこう。

実際の年齢は…… 34歳といったほうがいいだろう。

以前、僕は信じてもらえないだろうが17歳まで生きて、とある日、その能力のまま赤ん坊となってしまった。

信じられるだろうか、この話が? よつて、そのままの能力（頭脳、運動神経、趣味など）を引き継いだままなのだ。

簡単に言つとゲームで全クリした後にもう一度初めからでステータス引継ぎといった感じなのだがこれがまた、退屈だった。

赤ん坊の頃はとりあえず母さんに手のかからないように夜鳴きを控え、スプーンを右手で綺麗に持つと驚かれたので翌日からは左手で握ることにした。

これにより、実際の赤ん坊のような仕草を見せたのだ。

生まれた当初から始まつたので抱き上げてくれた看護士さんに口が滑つて『ありがとうございます』なんか言つてしまつたらぎよつとしていた。これは失敗したと思っている。しゃべれる言葉は『ばぶ！』この一言だけで我慢して、育児の本（赤ん坊がどういった行動をするか知るため）を適当に読みつつ、他人より若干発育の遅い赤ん坊を演じていたのだった……。

それ以降、夜鳴きもせずに母が昼飯を準備するまで買つてもらつたクマ（これがまたリアルなクマのぬいぐるみだった）の耳を甘噛みするまねをしていたりもした。

「まあ、義人はいい子ねえ~」

ずっと、そういう続けられた子どもはまあ、そこまでいないように違いない。だが、僕は十七歳の心を持っているのだ。お漏らしじゼロ、

うこも自分でやっていたのだ！正直言つてこれはもう赤ん坊のレベルでないということを両親が気がついていないことに驚いたのだが、僕としてはこれでよかつたと思える。

まあ、その結果として……両親は殆ど家にいなくなってしまった。つまり、手のかからなくなつた俺を放つておいても大丈夫だと認識したのかずつと仕事に行つたきりだつたのだ。そのおかげで母さんと父さんは大忙しで、休日、僕は一人であることを練習していた。

二周目の特典かどうかは知らないが、波動を出せるようになったのである！

「ていつ！！」

両親がいなきとき、ずっとこれの練習をしたのだ！僕は！そして、気がついたのだが……

「こ、この能力って正直平和な世の中では必要ないのでは？」

四つんばいになつて気がついたのだが、本当に必要がないのだ。ちょっとかいを出してくる上級生とかそういうのに対しても勿論使つていつているが、一番威力の少ないもので撃退している。

右手、左手のどちらかを振つて衝撃波を放つ“血扇”、若干強そうな相手には左手、左手のどちらかを勢い良く突き出して衝撃波と打撃を撃ち込む“血槍”^{けっそう}まあ、他にも色々と応用技やらなにやらあるのだが……そういつた物騒なものを極力使うことなく僕は気がつければ高校二年生になつていたのである。

そして、前にも言ったとおり、美咲ちゃんの相手をしているだけに過ぎない。

「ねえ、何してるの？」

「読書……」

今日もまた、そいつたやり取りが行われる……

事情が変わつたのは次の日からだつた。

第五話・遅刻したトップアイドル！（前書き）

義人「え、今日からとうとう……の方方が消えてしましました……まあ、前座をやっていたような感じの人たちだつたのですが、僕としては消えてもかまわなか……」時雨「……誰が消えたんだつて？」義人「！？」時雨「今度からはこっちでお世話になるよ」義人「…………さ、さて、今のところの予定では毎週土曜に更新したいと思っていますが、メッセージなんかをもらえると嬉しいんでそのときにも更新しようかな～っておもつてます」時雨「僕に対してのご意見、ご要望もよろしくお願ひしたいとおもいます」義人「…………先輩、僕が主人公ですよ」

第五話：遅刻したトップアイドル！

五

一 やべえ！ 遅刻だ！！

僕、坂凪義人は確実に遅刻へのロンドを刻んでいたりする。まるでそれは螺旋階段を駆け下りる……否、転げ落ちるようなスピードで僕は自転車をこぎまくつている。

「！？」

そして、事故つてしまつた。

ぶつ壊れた自転車がゴミ捨て場の壁にめり込んで後輪が宙に浮いて力なくからからと回っている。

あ、危なかつた、怪我ない?

一 大丈夫です。 あたたか

しりもちをついてハンツを僕に見せている女子生徒をみると、去年見たことがないような少女だった。どこかで見たことがある……。そんな気もしたのだが、今はそれどころではなかつたが女子と話す機会はあんまりないので色々とたずねることにした。勿論、時間がないので急いでたつて学校へとともにに向かいながら出発はしているのだが……。

「あつと、同じ学校の子だよね？」

制服を確認するが間違いなくこの制服はうちの女子生徒が着ている奴だ。

「成る程……転校生？」

「そうですね」

頷いてそういうが、続けて彼女は言った。

「ちょうど道がわからないところでしたからあなたにあつてよかつたつす……名前はなんていうつすか？」

「僕？僕は坂凪義人だよ」

「成る程、私が年上だつたら義人、タメだつたら義人君、年下だつたら義人先輩つすね……何年生つすか？」

「一年生だと相手に伝えると『それなら義人君決定つすね』といつた。

「君、そういうえば名前、なんていうの？」

「え？私の名前知らないつすか？」

驚いたような顔をする謎の相手。

「ごめん、知らない」

「う～ん、結構がんばつたつて自分では思つてたんすけどね～……島津プリンつす。どつすか？思い出したつすか？」

「名前がおかしいのは今の時代、良くあることだが……プリン……う～ん、どこかで聞いたことあるんだけどな……。」

「わかんない」

「道理で私を見てもサインしてくれ～とか握手してくれ～とか言ってこなかつたすね……私の正体はつすね～」

「彼女が言おうとしていると、僕の背中に何かが直撃する。

「がはつ！」

「だ、大丈夫つすか！？義人君！！」

「あははつ！直撃～。間抜けな義人にクリーンヒット～！」

「この声、そして相手を小ばかにしたこの調子……」

「何だ、ミルフィイじやないか……まったく、朝から馬鹿やつてる時間ないだろ？どうせ今日も遅刻だらうからね」

「何よ！あんたこそ朝つぱらから生意氣にも女子生徒と仲良く登校しているなんておかしいじやない？あんたの武勇伝聞いて近寄つくる女子生徒がまだいるとは思つてなかつたけどね

「相良ミルフィイ。」

お金持ちのとこのお嬢さんで僕の幼馴染に当たる。

中学三年に入り、転校したのでこれでいじめられずにすると思つていたのだが高校が同じであることに気がつき、一年のときは極力存在を隠していたのだが発見されてしまふと、初恋が見事に失敗したことなどをことじとく披露。

さらにあることないと適当なことを言いふらした挙句、僕は女子にもてなくなってしまった。

残念なことに男子は僕とミルフィイが付き合つてると勘違いしており、生暖かい目で僕らを応援してくれていた。

バレンタインデーのときもミルフィイはなんだかんだで『幼馴染だから』という理由でチョコをくれたりクリスマスのときも『あたし、夢はサンタだから』ということでプレゼントもくれる意外といい奴なのかも知れない。中学生のころは『Sの相良にSなのにMの坂田』ってよく言われてたからな……勿論、そういうた奴らは全部校舎裏でしめてやつたさ

「つて……あんた、いつの間にアイドルと仲良しになつたのよ？」

「ああ、成る程だからどうかで見たことがあるつて思つたんだ……」

納得がいった。基本的に僕はニュースとかしか見てないからなあ。ドラマとかそういうの見てないし……知らなかつた。

「へえ、ま、いいわ。どうせあんたみたいな男をトップアイドルが気にするわけないし……義人はありがた〜く、プリンを揉んでおくのね。じゃあね」

あつという間にミルフィイは去つていった。一体、何がしたかったのだろうか？

「…………相変わらず変わつた人つすね」

「うん、そうだね……つて、ミルフィイのこと知つてゐの?・島津さん?」

「プリンでいいすよ……そりやまあ、アイドル同士つすから」

「嘘!? プリンは可愛いからわかるけどあのサディストミルフィイが

アイドルだつて？そんなに皆彼女にぶたれたいのかな？」

彼女がふつってきた男の数はそれはもう、両手を使つても足りないし、両足使つても足りない。しかし、振られた連中は何かうれしそうな顔をしていたらしい…………というのは『あんたなんかと付き合う気なんてないわ！』というミルフィのビンタが最高だ！という事情がある。

「あれ？ 義人君は知らなかつたっすか？ アイドルつてこと

「ぜ～んぜん。そんな前からアイドルだつたのか…………」

「いや、一年ぐらい前からつすね。中学三年生のころつす」

「ふ～ん、まあ、別にミルフィのことはどうでもいいんだけどね……」

その瞬間、悪寒がした。そして、ついでにどこかでチャイムが鳴り響いたのだった。

今日の遅刻者は二人！ トップアイドルの島津プリンと学校内じや知らない奴は一人もいないロリコン足フェチ盗撮マニアと噂の坂凪義人、この僕のことである。肩書きは勿論あのS相良ミルフィのせいであるが…………。

「はあ、何でこんなことになつたんだろう……自転車、壊れちゃつたし…………」

「まあまあ、もう終わるつすから泣き言いつたつてしようがないつすよ」

遅刻者は特別教室の掃除をしなくてはいけない！ というのがこの学校の校則だつたりする。けどまあ、今回の遅刻者が二人で、珍しく普段から遅刻するような奴が早めに登校してたりした。その理由がどこから情報が漏れたのかトップアイドルの島津プリンが転校していくというものだつたりするのだが…………彼はこういった。

「畜生！ せつからく島津プリンと二人つきりで特別教室を掃除するなんて……坂凪、今度決闘だ！！」

勿論、僕は軽く受け流したが周りの男子の静かな殺意が恐かつた。

「先生！坂凪が島津さんに襲い掛かると思われます！僕に監視をさせてください！！」

一人がそういうと近くの男子が手をあげる。

「駄目だ！貴様のほうがしそうだ！先生！俺をぜひとも島津プリン防衛隊隊長に任命してください！」

がやがやと騒ぎまくつて一時間目は授業どころではなかつた。

「あ～あ、本当に毎間はついてなかつたなあ…………」

「そうつすね～確かに色々といわれているようには見えてたつすべき、ミルフィに助けられたつすね？」

言わされたことに僕は頷いた。いや、別に彼女がいつものように僕を「ケにしに来ただけなのだが…………」

『ねえ！皆知ってる？義人つてば島津プリンのことを知らなかつたのよ！――アイドルによりも二次元の美少女ゲットに萌えてる……そんなん奴だつたのよ！』

結果、オタクという称号がついてしまつた…………前世じやこんな小つるさい幼馴染なんていなかつたんだけどな。どこでミスつたんだろう？夕焼けを見ながら考えてみるが答えはでてこない。

「さ、終わつたつすよ」

「ん？じや、帰ろうか？」

「そうつすね」

プリンとともに掃除道具を片付けて職員室に行くために扉を開ける。時刻はP M 5：30だ。

「…………あれ？」

「どうしたの？」

先に飛び出たプリンが首をかしげる。

次に出てきた僕も動きを止めた。

特別教室に入つてまだ一時間もたつてない。

春先だからまだ日が沈むには早い時間帯のはずだつたのだが、空は真つ暗、先ほどまで大きかつた夕焼けは消えていたし、空には雲が出ていないが月も出ていない。きらめくお星様だつて窓から僕らを

見下ろしてくれてはいなかつた。だが、不思議と学校内部、プリンの顔などはしっかりと確認できたりする。

「これは……一体……何つすか？」

首をかしげるプリンに対して僕も当然首をかしげる。

「さあ？さつきまで夕焼けあつたよね？」

頷き、あたりをきよろきよろとしたりする。

「廊下にもたくさん人だかりが出来ていたつす。人の気配もすべて消えているし……一体全体、何がおこつたん…………！？」

プリンがぎよつとして廊下の奥を見る。僕も同じようにしてそちらのほうを見るが、別に何もなかつた。

「どうしたの？」

「いや……人影が見えたような気がしたつすけどね…………とりあえず、校舎を出たほうがいいような気がするつす。それになんか、とても肌寒いっす」

自分の肩を抱いて彼女はそんなことを言つた。確かに、先ほどまでは冬物の学ランが暑いと思っていたのだが今はこのぐらいがちょうどいいと思われていた。

職員室にいくことなく僕らは急いで靴を履き替えて外に出ようとしだが……

「あれ？開かないっすね」

「ホントだ……」

鍵はかかっていないのだが扉がびくともしない。けりを前面ガラス張りの扉に食らわせても割れないし、近くの窓に向かつてかさてをぶつけてみたのだがこちらも割れなかつた。いつの間にうちの学校は超硬度ガラスを使用する気になつたのだろうか？こんなことする前に壊れたトイレを修理したほうがいいと思つただが……

「閉じ込められた…………つすね」

「やけに冷静だね…………」

「ま、ここで騒いでも義人君の足手まといになるし、死ぬときは起き

つと義人君と一緒にす

なんか普段聞いたら嬉しい言葉だがこの状況で言われてもあんまり嬉しくない。そして僕自身が「冗談を考えている場合ではないということに気がついた。

「……ちょっとどいでて

右腕に力をこめる。なんとなく、『血扇』、『血槍』を使えばこの窓を壊せると思ったのだが……その僕の腕をプリンが止めた。

「……何をするかよくわからないつすけど、やめたほうがいいと思つます」

「……なんで？」

とりあえず右腕を下ろしてプリンの顔を見る。青ざめたよつな感じのプリンだったが、声はしっかりと誰もいない廊下に響き渡るほどの声で言った。

「……ここは文字通り、『扉』つす。それで、義人君が何をするかわからなかつたつすけどもしかしたら何かこの『扉』を開けるための“鍵”を出そつとしているつておもつたつすよ……確かに扉を開ければ私たち一人はこの建物から出られるつす。けど、『扉』の向こうにいる連中もこつちに入つてくるつてつす」

「え？ “扉”の向こうつて……」

前面ガラス張りの扉を見るのだがあちらのほうに誰かがいるつには見えない。

「あくまで例えの話つす……開ける、開けないは義人君の好きなようにしていいつすよ？ けど、その前にもう一度おとなしくこの学校内を探索したほうがいいと思うつすよ……どうつすか？」

プリンはどうやら僕に従つよつだ。選択肢が出るとしたら

プリンの言葉を無視して窓を壊す

プリンの言葉を信じて校舎を調べる

こんなものだらうな。僕はプリンの言つたことを試すこととした。窓を壊してしまえばやはりあとで責められてしまうだらう。それに、直感的にだがプリンに従つたほうがいいように思われた。

「じゃ、ついでに学校内にどんなものがあるかも教えておくれよ」「ああ、それいいっすね。よろしくおねがいするつすよ」「うひして、僕はプリンに校舎内を案内する」ととなつたのだった。

音楽室、図書館、生物室に地下室、美術室や書道室などなど、たくさんの特別教室を紹介しておいた。校長室などもあつたのだがこつちは必要ないだらうから無視しておいた。

「へえ、たくさんあるつすねえ」

「まあ、どこもそんなもんだらうけどね…………最後は屋上かな?」ま、開いてないだらうけどね…………とは言わなかつた。もしかしたら開いているかもしぬない、そんな期待が僕の胸に宿つたからだ。

第六話・扉を開けるヒヤーは…………（前書き）

義人「え～前回、報告ミスといつが、お知らせするのを忘れて増したが……更新日予定は土曜日といつといひまではいつていたとおもいます。それと、時間帯的には夜七時ごろつてところですね。では、今回もお楽しみ下さい」

第六話・扉を開けるヒヤーは……

六、

「屋上、開いていないはずの扉はあいつと開いた。

「あれ？」

「……」

しかも、開いたと思つて気がついてみたらそこは今の僕の部屋だつた。

「やけに私物が散乱している屋上つすね？しかも、屋上なのに屋根があるし……おや？ベッドの下に本が……」

見られるといふことやばやつだったので慌ててパソコンの背中を叩く。

「な、なんかよくわからないけど僕の部屋に出てみたい」

時刻は六時を指していた。

「あれ？あっちには三十分もいたつすか……とりあえず、義人君の部屋が『ゴールとなつてたみたいっすね？』

「う、うんそだね……一体、あれはなんだつたんだろ？」「首をかしげてさりげなくベッドの奥のほうに本を押し込む。勿論、ばれないうつにさりげなく。

「何隠してるつすか？」

「ば、ばれてる……。」

「あー、口本つすね！？」

何をそんなに嬉しそうにしているのだらうか、このトップアイドルさんは……

「あ、いや、これはね……」

「いやあ、お昼に義人君は男が好きだつて聞いたものつすからほつとしたつすよ」

「誰だらう、それを言つた奴は？あとでボコボコしておひづ。

「ブ、ブロンさん？」

「何っすか？」

「ニヤニヤしている…………トップアイドルはにせにせなんてするのだろうか…………プリンを見て僕は頭を下げた。

「このことは内密にお願いします！！」

「う～ん、そうっすね…………考えてあげてもいいっすけど…………それなら、今日のことは誰にも言わないって約束してくれるならいいっすよ？」

「今日のこと？あの変な学校のこと？」

「そっす！」

嬉しそうに頷くプリンを見て僕はため息を一つついた。

「勿論だよ…………これ以上変な奴だつて思われたくないから約束っすよ？」

いつの間にか僕の両手を掴んで顔をぐつと近づけて彼女は言った。「わ、わかってるよ…………」

女子にこんなに顔を近づけられたのは初めてだつたのでびくびくしてしまつたのだが僕は敢えて冷静さを保つて頷いたのだった。

その日、僕は夢を見ていた。

「ねえ、義人君…………本当に厄介」とに首をつつむのがすきなんだね？」

「そうよねえ、小さい頃から逃げればいいのに…………自ら突き進むなんてよつぽども馬鹿よね？」

なぜだろう、僕の知り合いたちが僕を馬鹿にしている。

「私が間違つて障子を破いちゃつたときも全然関係ない義人君がわざと破つたつてそういうて怒られたりしたし…………」

「あたしが不良に絡まれたときだつてのこのこやつてきて相手をボボにして停学を喰らつたりしてさ…………」

あれ？よかれと思つてやつたのに何故怒つている様子なのだろうか……

「「また、厄介ごとをつれてきたみたいだし」「…………」

美咲ちゃんと『ルフィ』が口をそろえてそうこうたとじゆで田をました。

「…………美咲ちゃんと『ルフィ』が出てくるなんていやな夢見たな……」

「え？ 私が出たらいやな夢なの？」

「…………」

何故か彼女は僕の胸に座つてゐる。うん、これは悪夢を見るね。

「じめん、重…………ぐああああつ」

美咲ちゃんに對して重いといつ単語は禁止だつたことを忘れていた。目が恐い。

「あ、じ、じめん……じめんつて！ 軽い！ まるで美咲ちゃんは羽のよつ！ フエザー？ フエザー級…………あ、そういえば相撲にフエザー級つてあつたつけ？…………ぎやああああああああ…………」

何故か機嫌の悪い美咲ちゃんは僕を潰そつとがんばつていた。

一方的なリンチを受け、朝食をとつて僕はため息をついていた。

「ふう…………」

今日はこれから用事があるのである。今日は休みなのだが、昨日、ちょっとプリンが約束事を持ちかけてきたのである。

「あ、義人君、ここら辺の道詳しいすよね？」

「ん、僕もこっちには引っ越してばかりなんだけど…………まあ、

一応はわかるよ」

「校舎内も案内してもらつたし、義人君の部屋の内部も案内してもらつたつすから今度は町の案内をお願いしてもいいですか？」

「うん、それはかまわないよ」

今頃学校では大騒ぎになつてゐるかもしれないなと地平線に沈み行く太陽を見ながら考えていた。

「じゃ、携帯のアドレスとか交換しておくれ」

「ん、わかつた…………」

トップアイドルがいつも簡単に電話番号、メールアドレスなどを

教えていいんだろうか？そんなことを考えていると彼女は言った。
「どうせ、義人君には価値がない物だつておもわれるつす」

「え？」

「だつて、私のことを知らないぐらいつすからね。それに私の携帯の電話帳、家族のものぐらいしかないつすよ。寂しいつすから義人君のを入れとくつす」

そう言つて交換終了し、さらに彼女は言った。

「明日、ちょっと付き合つてもらいたいつす」

付き合つて……そういうわれた瞬間に心が天国に行つてしまつたが、ああ、これはあした荷物もちをしてくれてといわれているんだと自分に言い聞かせた。

「ん、わかつた」

「明日、迎えに来るからそれまでに用意をお願いしたいとおもうつす……あ、義人くんつて何だが言つづらいんでヨックンでいいつすか？」

「……呼びづらいかな？まあ、いいけどさ」

「そつすか、じゃ、絶対に私のことを優先にして欲しつす」
昨日はそれで別れたのだった。

部屋にいると美咲ちゃんが興奮した様子で入ってきた。

「よ、義人君ーし、島津プリンがこの家にやつってきたよ！……しかも！義人君のことを呼んでるみたい！知り合ひだつたの！？」

ああ、そういうえば昨日美咲ちゃんは部活にいつていったから家にはいなかつたんだつたな。ま、家に帰つてきて詳しく説明することとしよう。

「ちつす、覚えてくれてて嬉しいつすよ」

「……ま、約束してからね」

土日、基本はミルフィイが僕を『あんたをパシリなさいつて神様が言つてたわ！だから付き合いなさい』といった感じでこき使うのだがこのまえ携帯を変えていて送つていないので彼女はいらつていだらう。ま、そんなことはどうでもいいんだが……

「ヨツクン、とりあえず文房具店とかそういうたものがどこにあるのか教えて欲しいっす」

「ん……わかつた」

文房具店へと向かう角を曲がる

「あにや？」

-
ん
?

何か、違和感を感じた。空が暗い、星が出てない、月がない！つて……昨日の一の舞なんじや……。

「お、またですか？」

隣でため息をついているプリンに同情したい。

「けどまあ、とりあえず一人じゃないんでよかってたつす」

出来れば一人以上でもこの場にいたくない。

さよろきよろとあたりを見渡していたプリンが慌てて僕の後ろに

隠れた

「あ、ああー二種かーあります！」

彼女が震えながら指差す方向に確かに人影があつた。よかつた、なんだかとても危ない空間に来たのかとおもつたんだけど人はいるようだ、一応。

僕はなんとも思わずその人影に近づこうとしたが、プリンが後ろから止める。

「待つっす！！」

「え? 何で?」

音韻に興味ある人へ

僕とプリンは一人して叫び声を出してその場を後にしてしまった。無論、転がるようにして逃げたのは間違いないが気がつけばプリン

を背負つて僕は走つていた。あれ？僕だけ重労働しているよつたな気がする。

「な、何あれ？」

「さ、さあ……まさか頭から伊勢えびが生えてるとはおもわなかつたつす」

いいや、プリンはそんなことを言つているがあればそんな生易しいものじやなかつた。確かに首から上が人間ではなく海老だつたのだが右胸のところからはトカゲが顔を出していたりもした。あれ、絶対に人間じやないだろ？キメラ…………そ、そんな感じがした。しかも失敗作だとおもわれる。

「…………とりあえず、この変な世界の出口を探さないと」

これ以上変なものを見る前にどこかに出ないといけない。今回、建物内部にいるわけではないので確實にプリンが言つていた話じや“扉”の向こう側にいるということになる。つまり、そろそろといるのだ、あんな連中が。

「…………なんか、巻き込んだみたいで悪いつすね」

「何に？」

「昨日と今日のこと実は初めてじやないつす」

「…………」

走りながらそんなことを彼女は告白した。

「この世界、一体全体何なのかはわからないうつすけど、とりあえず危ないつてことはわかつているつす。まだこれで十回つすけどはじめは夢の中でしか見たことがなかつたつすよ。けど、三回はもう頭がおかしくなるかもつて、毎日毎日眠れなくなつて…………気がつけば何もかもがいやになつてアイドルを辞めて学校も転校したつす…………昨日の朝、ヨックンに衝突されたときに重たい心が若干晴れた気がしたつすよ」

そういうえばヘッドバッドをプリンに食らわせたよつたな気がする。

そのとき、移つたのだろうか、この世界が…………。

「あの世界、一回田のときは友達といたつすけど気がつけば自分ひとりでいたつすよ。けど、ヨックンとは違つた。……一緒にこれたつす。自分勝手だつたけど……一緒にいればこっちの世界に連れ込めるつて確信したつすよ。……最悪つすね、私は」

下を向いてそんなことを言つ。

「……ま、まあ確かに最悪つちや最悪だけね。……それより、この世界から何とか抜け出さないと。……もつ十回田なら抜け出す方法知つてるんぢやない? ほら、しょげてる前にかれる方法を見つけよう?」

僕よりあつちのほうが慣れっこだ。郷に入れば郷に従え。……僕は素直に彼女の言つとおりにすることにした。

「……なんとなくだけど、学校内に入れれば大丈夫だつておもつす」

「学校?」

「そうつす。この世界で一度出口を見つけてしまえばそこから出れるつすよ! 外から始まつちやつたことは今日がはじめてつすけど建物内部のときは表の世界、……普段生活しているほうの世界のことつす。……そつちでは鍵などがあつて絶対に入れない場所の扉がゴールつてことになつてるつす」

成る程、だから普段は開いていない屋上が開いていたのか。僕らはいそいで学校へと向かうことにした。

「うわ! 何あれ! ?」

学校途中、道に魔法陣のようなものがひとりでに描かれていて虹色に光りだす。

「……多分、さつきみたいな変なものを生成するものだとおもつす」

「……どういうこと?」

「しかも敵意を感じるつす! あれが生まれる前に学校内に入らないとやばいかもしだいっす! !」

彼女の顔が青白く浮かび上がる。僕は慌てて彼女の手を掴むと校

庭を突破！いたるところに魔法陣が形成されている。

「つと……セーフ！！」

「あ、危なかつたっすね」

何とか校舎内に滑り込んだ僕たちは息つく暇もないという調子でそのまま階段を駆け上がつていって屋上の扉を開けたのだった。

第六話・扉を開けるヒヤリは……（後書き）

ども、雨月です。雨月の作品で時雨君の存在を知ってくれているなら……じつは今のところ時雨君シリーズを新たに書いています。そのときはまあ、よろしくお願いします。

第七話・「れつきり（前書き）

義人「え、今回で最後となりました……今思えばガツツが足りなかつたな……こんしんのギャグを考えましたんでそつちもよろしく！あとがきのほうでは作者の今後の予定が少しだけ、わかります」

七、

扉を開けるとそこには普通の屋上。……以前は僕の部屋に直結していたとおもつたのだが今回は今回でこれまた普通に出てしまった。

「…………ここ、ほんとうになんなんすかね~」

「さあ？それよりも…………屋上から出ようにも出れないような気がしてならないんだけど…………」

ガチャガチャとノブをひねっているのだが困ったことに屋上の扉は開いてはくれなかつた。

「うーん、反抗期つすかね？」

「…………扉に反抗期も何もないとおもつけどね…………しうがない、連絡して誰かに助けてもらおう…………ん？」

よくよく見てみれば屋上の先つちょのほうには看板が立てかけられ、そこには次のような文字が書かれていた。

『…………良くぞ現れた、勇者よ…………そなたにはここに学校の地下迷宮に挑戦する権利を与えよう…………ここにあるロープを掴むが良い』

「…………なんだ？これ？」

「新手のいたずらつすかね？」

どつからどう見ても高校生が書いたとしか思えないへたれた字に若干辟易したのだがこれはまた…………どうしたことだろうか？プリンはまるで飛んで火にいる夏の虫のようにふらふらとそのロープに近づいていくと

「い、いつでも大丈夫つすよね？」

え？何？そのいくならヨツクンもいくつすよね？つていう表情

……おいおいおい！！まずは自分の中にあるあの不思議迷宮をクリアすべきじゃないのか！？

ただ、心の中でおもつてているだけでは人に伝わらないことも多々あるようで彼女はあつさりとロープを掴むと僕が静止することもな

く
.....

しかし僕たちは再び別の世界へと旅立つたのであった。

～END～

「あ、今思ついたネタなんだけど.....」

「何つすか？聞いてあげるつすよ」

「.....遠藤さんがこいつた.....これでえんじつ（END）---.」

第七話…いれつきり（後書き）

さて、終わつてしまひました……ですがまあ、今は別の小説を考え
ており、半ば六話分ほどたまつています。先に言つておきますが主
人公はあの方、そう時雨君です。時雨君のファンの皆さん（いるん
だろうか……）期待しててまつていてくださいー。おつと、題名
を言いそびれていましたが『夢の生まれる場所、心龍の田覓め』の
予定です。メッセージなんかもらえると早くなるかもと考えていた
りしていくください。さて、そろそろ調子にのつてしまつ頃合な
でこれまで応援してくださつた人たち……ありがとうございます
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6820e/>

VITAL・CHAIN ~天魔ノ飛翔~

2010年10月8日15時27分発行